





（琳派ミニワークショップの実施期間中は、ミュージアム・カードはお休みいたします。）

——かたちを受け継ぐ——  
 直接の師弟関係を持たず、世代を超えて受け継がれてきた琳派の流れ。それを端的に示すのが、模写という行為です。作品を通じてしかつなぐることができない琳派にとって、模写はすなわち琳派に加わることの意思表明でもありました。名高い「風神雷神図」を筆頭に、「三十六歌仙図」など、本章では、琳派に連なる画家たちが共有する画題の作品を紹介します。



重要文化財 秋草文様小袖 尾形光琳画  
 東京国立博物館（10月27日～11月23日展示）



国宝 八橋蒔絵螺鈿硯箱  
 尾形光琳作  
 東京国立博物館  
 （11月3日～11月23日展示）



色絵菊園向付 尾形乾山作  
 東京・五島美術館（全期間展示）

——くらしを彩る——  
 鷹峯の光悦村を琳派のはじまりに据える時、そこから見えてくるのは、金工・漆芸・陶芸といった、くらしを彩る工芸品との繋がりやの深さです。現代では隔たりがあるかのように見える美術と工芸の境界を、琳派の芸術家たちはやすやすと越えていきます。高級品を享受する人々が居住し、それを作り出す職人たちが集住する京で誕生した琳派。彼らが創り出した工芸意匠——琳派デザイン——は、出版というメディアによって拡散され、さらに広い階層の人々のくらしを飾っていったのです。

### 光琳の後継者たち 琳派転生

光琳自らは後継者を育てることはありませんでしたが、没後、その画風を慕って、京都では深江芦舟や渡辺始興、大坂では中村芳中、江戸では立林荷昂、酒井抱一、鈴木其一らが活躍します。なかでも別格の存在が、酒井抱一です。姫路藩主・酒井家の一員として江戸に生まれた抱一は、洒脱な江戸文化を謳歌しながら、次第に光琳の芸術に傾倒していきます。ついには、光琳の作品を集めた「光琳百図」を発刊、その画業を顕彰するとともに、後に琳派と呼ばれる系譜を「尾形流」として初めて明確に跡付けました。江戸の地に転生することによって、新たな広がりを見せていく琳派の姿を追いながら、本展は幕を閉じます。

現代でもそここに琳派の面影を感じることができ京都。折しも今秋は、京をあげての琳派四百年祭が挙行されます。展示会を楽しまれた後は、ぜひ京都の街を歩き、現代に息づく琳派を探しに出かけてみてください。きっと新しい発見があることでしょう。  
 （山川 曉）



重要文化財 梅樹下草文様小袖 酒井抱一画  
 千葉・国立歴史民俗博物館  
 （10月10日～11月1日展示）



流辺楓樹図屏風 酒井抱一筆（11月3日～11月23日展示）

【観覧料】  
 一般 1500円（1300円）  
 大学生 1200円（1000円）  
 高校生 900円（700円）  
 \*（一）内の料金は団体20名以上  
 \*展示期間中、作品保護のため展示替えを行います。

## 平成知新館 名品ギャラリー（12月15日より）

- 3F-1 陶磁
- \*休室
- 3F-2 考古
- \*休室
- 2F-1～5

### 【新春特集陳列】

さるづくし「千支を愛でる」

- 12月15日（火）～1月24日（日）
- 1F-1 彫刻
- 【日本とアジア彫刻】
- 【琳派と同時代の彫刻】
- 10月10日（土）～11月23日（月・祝）
- 【日本とアジア彫刻】
- 【地蔵と十王像】
- 12月15日（火）～3月21日（月・祝）
- 1F-2 特別展示室

### 【特集陳列】

刀剣を楽しむ—名物刀を中心に—

- 12月15日（火）～2月21日（日）
- 1F-3 書跡
- 【かなの美と和歌】
- 12月15日（火）～1月24日（日）
- 1F-4 染織
- 【吉祥の文様】
- 12月15日（火）～1月31日（日）
- 1F-5

- 【特集陳列】 獅子と狛犬
- 12月15日（火）～3月13日（日）
- 1F-6 漆工
- 【夏を彩るうるしの器】
- 12月15日（火）～1月31日（日）

### 特集陳列

## 刀剣を楽しむ

### —名物刀を中心に—

平成27年12月15日（火）～平成28年2月21日（日）  
 【平成知新館 特別展示室】  
 王城の地である京都では、平安時代から多数の刀工が工房を構え、名刀を生み出してきました。そして、それぞれの時代に造られた刀達は時代を超え、さまざまな歴史の場面に立会いました。

この特集陳列では、後鳥羽上皇が御自ら手がけたとされる太刀「菊御作」、斬りつける真似をするだけで相手の骨が砕けるといふ伝説を持つ「薙刀直シ刀（名物骨喰藤四郎）」（重文、豊国神社蔵）をはじめ、桶狭間の戦いで織田信長の戦利品である「刀（名物義元左文字）」（重文、建勲神社蔵）、坂本龍馬所用の「刀 銘吉行」（京都国立博物館蔵）など、ドラマティックな歴史を持つ名物の数々をご紹介します。作品に秘められた歴史とあわせて、奥深い刀剣の美の世界をお楽しみください。  
 （末兼俊彦）

### （主な展示作品）

- 重要文化財 太刀 菊御作 京都国立博物館
- 重要文化財 刀 金象嵌銘永禄三年五月十九日義元討捕刻彼所持刀／織田尾張守信長（名物義元左文字） 京都・建勲神社
- 重要文化財 薙刀直シ刀 無銘（名物骨喰藤四郎） 京都・豊国神社
- 重要文化財 短刀 銘吉光（名物秋田藤四郎）
- 重要美術品 短刀 無銘（名物上部當麻）
- 刀 銘吉行 坂本龍馬所用 京都国立博物館
- 刀 銘長曾祢虎徹入道興里 京都国立博物館



重要文化財 太刀 菊御作 京都国立博物館



刀 銘吉行 坂本龍馬所用 京都国立博物館

### 特集陳列

## 獅子と狛犬

### —平成知新館 1F-5—

獅子、狛犬ともに百獣の王ライオンの姿を写したもので、頭上に一本の角のある方を狛犬、無い方を獅子と呼びます。エジプト、中東地域では写実的なライオンの像が造られました。生息地から遠く離れた中国では姿が変わって唐獅子となり、それが日本に伝わりました。平安時代以降神社や寺院の入り口、あるいはお堂に置かれ、境内や神仏の像を守護する役を担ったのです。10対ほどの獅子・狛犬を並べた空間をおたのしみください。  
 （浅見龍介）



獅子・狛犬（峰定寺伝来）京都国立博物館

【観覧料】  
 一般 5200円（4100円）  
 大学生 2600円（2100円）  
 高校生以下および満18歳未満、満70歳以上無料  
 \*（一）内の料金は団体20名以上

# さるづくし

## 「干支を愛でる」

平成27年12月15日(火)～平成28年1月24日(日)

【平成知新館 2F-1-5】

来年、二〇一六(平成二十八)年の干支は申(さる)です。これにちなんで、年末から新春にかけての京都国立博物館では、猿を描いた絵画や、モチーフにした工芸品を集めています。

ニホンザルは、古くは山間部だけでなく人里に近い場所にも分布しており、人々にとって身近な動物でした。そのため、多くの日本文化と深いかわりを持っています。たとえば、比叡山に棲息していた猿が、天台宗延暦寺の護法神である日吉大社の使いとして祀られたことはよく知られています。また、あの有名な三猿(見ざる・聞かざる・言わざる)は、もともと庚申信仰において除災延命を祈念して青面金剛像を祀る際に、その脇に配されたことで民間に広まった図柄なのです。本展示では、このような信仰の世界における猿の姿もご紹介します。

美術の世界では、中世の水墨画家たちが中国・南宋時代の画僧牧谿の描いた柔らかかみのあるテナガザルに憧れ、日本では見ることの難しかったその姿をしばしば絵に表しました。江戸時代には、伊藤若冲(一七一六～一八〇〇)や曾我蕭白(一七三〇～一七八二)など錚々たる絵師たちが、それぞれに個性豊かな猿を描いています。とくに、ニホンザルを山中で数年観察したという伝説さえある森狙仙(一七四七～一八二二)の作品は、体毛の一本一本を精細に描くことによつて、生命感あふれる猿の姿を表現しています。人間に最も近い動物、猿。本展示で、日本や中国において親しまれてきたその多彩なイメージを是非お楽しみいただきたいと思えます。

(井並林太郎)



猿図 伊藤若冲筆



花卉鳥獸図巻 部分 国井応文・望月玉泉筆 京都国立博物館



猿図 森狙仙筆 兵庫・柿本神社



猿圖 雪村筆



重要文化財 巖樹遊猿図屏風 式部輝忠筆 京都国立博物館

## 楽しんでいよう、いろいろ!!

### 「教育普及活動のご報告」

#### ●「こども☆ひかりフェスティバル」(仙台)

平成27年6月14日に、仙台市の縄文の森広場で行われた「こども☆ひかりフェスティバル」に参加しました。本イベントは、東日本大震災の被災地の子どもたちを応援するために、全国さまざまな分野のミュージアムが集まり、体験プログラムを行うイベントです。当館の「ミニ掛軸をつくろう」ブースでは、ユーススタッフ(東北の大学生)と一緒に、包装紙を用いたミニ掛軸作りをしました。日本美術では、作品とともに、それを飾るための仕組みにも心を配っていることを知ってもらうためです。作品に似合う包装紙を選び、パーツを糊で貼るだけなので、作り方はシンプルですが、出来上がりは本格仕様です。完成した掛軸に、参加した子ども達も満悦の様子でした。約90名の子ども達も参加し、色とりどりの個性豊かな掛軸が出来上がりました。



#### ●第14回少年少女博物館くらぶ「ドキドキ!刀にふれてみよう!」

平成27年7月19日・20日に、名品ギャラリーの展示「室町時代の金工」にあわせ、小学校4年生から中学生を対象にした体験イベントを実施しました。



教育普及のためにご寄贈いただいた本物の短刀(安全のため刃はおとされています)を用いて、実際に手にとりながら刀の手入れ方法を体験してもらいました。どの子ども達も、真剣な表情で刀を取り扱っていました。

## よみもの

### 「桃山時代の狩野派」展から考えたこと

同志社大学教授 狩野博幸

いつの頃からだったか、おそらくは欧米の美術研究の流行に棹差すものだろうが、桃山時代の襖絵や屏風絵に対して「工房作」と上から目線<sup>めいせん</sup>で評する研究が多くなった。学問的緻密性なのだろう。それがどうした、とするのが僕の研究スタンスである。

日本風俗画史上の文字どおりの金字塔たる「上杉家本洛中洛外図屏風」を詳細に検討した結果、右隻と左隻の人物表現に微妙な相違が見えたため、この屏風は「狩野永徳筆」ではなく「永徳と工房筆」とすべきであるとの意見を耳にした。緻密さこそ研究と信じる人には悪いが、愚かにも程があると僕は思う。こういう人たちはシステムナ札拜堂の「天地創造」や「最後の審判」も、「ミケランジェロ・デイ・ブオナロティシモーニと工房作」と判じるのであろう。

掛軸画や扇面画ならともかく、桃山時代以降の障屏画が独りの画家の手になるはずが無い。襖でも屏風でも、ことに金碧濃彩画の場合、いわば初期的設計図というべき「小下絵」を注文主に見せて許可を得た上でそれを襖絵に作り上げる際に、弟子たちに分業させる。ほぼ完成した絵に最終的に輪郭線を棟梁が墨を入れてゆく(描き起し)という。この棟梁が画者である。室町時代末の元信から始まったこの集団制作によつて狩野派が隆盛を迎える。二条城大広間の松の葉の緑青を狩野探幽が塗っていたわけではない。では、こういおうか。武士の情で実名は挙げないが、研究と称する半端な賢しら<sup>けんしら</sup>をひけらかすものではない。では、こういおうか。武士の情で実名は挙げないが、最近物故した超有名な日本画家の風景画は、撮つて来たスライド写真をスクリーンならぬ屏風画面に映写して、それを基に作画していた。「永徳と工房筆」のひそみに做えば、「日とカメラ筆」と題簽に記すべきであろう。阿々。何ゆえかかる駄弁を弄したかといえば、この度の「桃山時代の狩野派 永徳の後継者たち」展では、款記を伴わず伝称だけしかない作品も、その画風や歴史記録を参考に可能な限り、その画家を特定しようとする態度が顕著と見えた。これは、実のところ案外に困難なのである。これまで諸書に書かれているように「伝誰それ筆」としておけば、まあそれで済むのだが、「誰それ筆」と断定するには勇気がいる。ことに国立博物館であるからには責任も生じて来る。その意味で、永徳の次男であり探幽の父でもある孝信の筆に帰している作品の多かったことはよろこばしい。孝信こそが、永徳没後の狩野派が江戸時代まで生き延び得たキー・パーソンだと僕が信じているからである。

永徳没後の狩野派の混乱時期において、将来を見据える冷静な眼を持ち、時代の流れを巧妙(ほとんど芸術的といえる)にかいくぐつて来た真の功績は、永徳の嫡男の光信ではなく孝信に帰すべきではないのか。もちろん、その孝信に対して時に応じて見事な助言を与えていたと考えられる人物、すなわち、永徳の急死から、秀吉の死、家康の胎頭、豊臣家の滅亡までをつぶさに眼にして来た、永徳の末の弟の長信を忘れてはなるまい。孝信の息子の三兄弟(探幽・尚信・安信)の徳川家奥絵師としての配置の妙を演出したのは、長信の見て来た経験則を抜きに語る事が出来ないと思われる。

だからこそこの時代が面白いのだ。会社経営の要諦、すなわち現代と通じる組織論の見本がこの時代の狩野派を知れば知るほど判るだろう。2015年、大学教育において人文系の学問など無用だと宣言したこの国が発狂したのは明らかではないか。

## 土曜講座

10月24日「光悦の作陶—自在な発想と造形—」\*

京都国立博物館研究員 降矢哲男

10月31日「琳派」の継承と広がり」\*

京都国立博物館研究員 福士雄也

11月7日「風神雷神図屏風の転生」\*

大和文華館学芸部長 中部義隆氏

11月14日「宗達の目の記憶」\*

大阪大学大学院文学研究科教授 奥平俊六氏

\*…特別展覧会「琳派 京を彩る」関連講座

※平成知新館 講堂にて、午後1時30分～3時に開催。定員200名、聴講無料（ただし、「琳派 京を彩る」観覧券が必要）。

※当日12時より、平成知新館1階にて整理券を配布します。先着順、定員になり次第、配布を終了します。

## 講演会・イベント

《特別展覧会「琳派 京を彩る」記念講演会》

テーマ 「くらしを彩る琳派の美」

講師 河野元昭氏（京都美術工芸大学学長）

日時 10月10日（土）午後1時30分～3時

会場 平成知新館 講堂（地下1階）

参加方法：当日12時より、平成知新館1階にて整理券を配布し、定員になり次第、配布を終了します。定員200名。聴講無料（ただし、「琳派 京を彩る」観覧券が必要）。

《京都ミュージアムズ・フォー連携フォーラム》

テーマ 「琳派を飾る—一展示会から見えるもの—」

日時 10月17日（土）午後1時30分～4時

場所 平成知新館 講堂（地下1階）

参加方法：当日12時より、平成知新館1階にて整理券を配布し、定員になり次第、配布を終了します。定員200名。聴講無料（ただし、「琳派 京を彩る」観覧券が必要）。

《京都・らくご博物館 秋》

日時 平成27年10月30日（金）18:00 開場 18:30 開演

会場 平成知新館 講堂（地下1階）

出演 桂弥太郎 桂紅雀 桂文之助 中入 桂団朝 笑福亭仁智

入場料 3100円／キャンパスメンバーズ2500円

（全席指定・特別展覧会団体割引引換券付）

※チケットご希望の方はお電話、またはWEBよりお申し込みください。

申し込み先：お電話／博物館事業推進係 075-531-7504（月～金の10～12時・13～17時に受付 ※祝日は除く）WEB／<http://www.kyohaku.go.jp> らくご博物館【秋】申し込み画面

## これからの展覧会

◆特集陳列 刀剣を楽しむ—名物刀を中心に—  
2015年12月15日（火）～2016年2月21日（日）

◆特集陳列 獅子と狛犬  
2015年12月15日（火）～2016年3月13日（日）

◆新春特集陳列 さるづくし—干支を愛でる—  
2015年12月15日（火）～2016年1月24日（日）

◆特集陳列 皇室ゆかりの名宝（仮）  
2016年1月26日（火）～2月21日（日）

◆特集陳列 雛まつりと人形  
2016年2月27日（土）～3月21日（月・祝）

## 国立博物館の展覧会

【東京国立博物館】

特別展「始皇帝と大兵馬俑」

10月27日（火）～2016年2月21日（日）

【奈良国立博物館】

特別展「第67回 正倉院展」

10月24日（土）～11月9日（月）

【九州国立博物館】

開館10周年記念特別展「美の国 日本」

10月18日（日）～11月29日（日）

## ◆ 明治古都館休館のお知らせ ◆

京都国立博物館では、今年度より埋蔵文化財発掘調査を行うことになりました。そのため、明治古都館を当分の間休館いたします。これまで平成知新館での「名品ギャラリー」、特別展覧会を開催する「明治古都館」と二つの展示をお楽しみいただきました。今後は、明治古都館の休館にともない、平成知新館にて特別展覧会を開催いたします。

特別展覧会の前後には、展示準備等のため、全館休館もしくは名品ギャラリーの部分閉館となりますが、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

【今後の全館休館および部分閉館の予定】

**全館休館** 9月14日（月）～10月9日（金）

11月24日（火）～12月14日（月）

12月26日（土）～2016年1月1日（金）

**部分閉館** 12月15日（火）～12月25日（金）

1～2F 各展示室（3Fは閉室）

## ご利用案内

【開館時間】〈10月10日～11月23日〉

9:30～18:00

金曜日は20:00まで開館

〈12月15日～12月25日〉

9:30～17:00

※入館は各閉館の30分前まで

【琳派 京を彩る】観覧料】

一般 1500円（1300円）

大学生 1200円（1000円）

高校生 900円（700円）

\*（ ）内は団体20名以上

\*名品ギャラリー観覧料＜12月15日～12月25日＞

一般520円（410円）、大学生260円（210円）、高校生以下および満18歳未満、満70歳以上の方は無料

【休館日】月曜日（月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館）

9月14日～10月9日、11月24日～12月14日、

12月26日～2016年1月1日

## アクセス

JR＝京都駅下車、市バスD2のりばより206・208号系統、D1のりばより100号系統にて博物館・三十三間堂下車すぐ  
プリンセスラインバス京都駅八条口のりばより京都女子大学前行にて東山七条下車、徒歩1分

近鉄電車＝丹波橋駅下車、京阪電車丹波橋駅から出町柳方面行にて七条駅下車、東へ徒歩7分

京阪電車＝七条駅下車、東へ徒歩7分

阪急電車＝河原町駅下車、京阪電車祇園四条駅から大阪方面行きにて七条駅下車、東へ徒歩7分

駐車場は有料となっております。ご来館の際は、なるべく公共交通機関をご利用ください。

\*「博物館だより」を郵送ご希望の方は、返信用封筒（角2封筒は120円、長3封筒は92円切手貼付、宛名明記）を同封して、当館企画室までお申し込みください。



〒605-0931 京都市東山区茶屋町 527

TEL. 075-525-2473 (テレホンサービス)

ホームページ <http://www.kyohaku.go.jp/>

発行日 2015年10月1日 デザイン 谷なつ子

編集・発行 京都国立博物館 印刷 野崎印刷紙業株式会社

京都国立博物館  
KYOTO NATIONAL MUSEUM